



民族の違いと国境を越えて異文化の世に飛び込むのは大変だ。まして、長い伝統と複雑なしきたりがある寺院に外国人が入れば、苦労は並行ないはずだ。だが、僧侶との結婚を機に無難な道を選んだ女性もいる。親鸞を宗祖とする真宗本願寺派（京本山・西本願寺）の「坊守会」のメンバーが主催し、同会が主催し、

「仏教国際化の最前線」と確信した。このころは平たく言わねば、本願寺の「坊守会」のメンバーが主催し、同会が主催し、

「お正月やお盆に夫の姉弟やその家族が20人以上帰ってくる。長男との結婚の大変さが身にしみました」（ピクトリアさん）

市、極楽寺）、英国人の吉村ピクトリアさん（宮崎県正念寺）。ジョアンナさんとベッティーナさんは次女を担う坊守だ。

田原由紀雄（専門編集委員）

西本願寺の「外国人坊守会」

故国で医学博士として要職に就きながら念仏の教えに出会い、僧侶に嫁いだアグネスさん、高校の英語教師として来日し、同僚で僧侶の夫と恋におちたピクトリアさん、建築の研修生として来日したベッティーナさん。人生の道程は違っても、みんな僧侶と結婚してお寺に入った女性たちだ。

「ドイツでは遺体は病院の霊安室から葬儀場に運びますが、日本では家やお寺に3日間も遺体を置く。最初は怖かったけれど、今は亡くなった人と長い時間をかけてお別れできる良い習慣だと思います」（ベッティーナさん）

「お正月やお盆に夫の姉弟やその家族が20人以上帰ってくる。長男との結婚の大変さが身にしみました」（ピクトリアさん）

カルチャーショックを経験しながら仏門に生きる女性たちがともに教を学ぼうと5年前に結成したのが「外国人坊守会」。学習会は会員以外の参加も自由で、もちろんバイリンガルだ。まず講師の信楽峻彦・元龍谷大学学長が英文でテキ

仏教国際化の最前線 確信

ストを使い、英語と日本語を交えて「仏教の根本原理」を講義。ベッティーナさんの夫が通訳を担当した。「信心」という真宗の教えの核心に触れる言葉を巡って白熱した議論になった。「私が信じて決めて信じているのではなく、阿彌陀仏から信じさせられる、というのが親鸞の信心だと思っています」とアグネスさん。会場の米人仏教学者は「一時、信心をフェイス（Faith）と訳していました。今は訳さずにシンジンという言葉を使うことも多い。翻訳自体が揺れている」

求道心・広い視野 新風

と指摘。ジョアンナさんは「翻訳は翻訳。仏教の本質は仏教を行じるものにとっ



学習会で仏教の根本原理について議論する外国人坊守会のメンバー—京都市下京区の本願寺国際センターで4月21日、小松雄介写す

ておのずから明らかにするのだと思います」と話した。「まだ50代の夫に死なれて泣き続ける女性を前に途方にくれました」というピクトリアさんに信楽さんは「時間が必要です。とにかく話を聞いてあげてください」と助言した。

出産を機に感受性が変わったという女性の体験談から話題は肉食から慈悲や知恵の概念へ。お勤めも含めて約4時間。これほど真剣な求道の場は珍しい。

「恋愛が出家の動機とは」と戸惑う向きがあるかもしれない。だが、親鸞は自ら

「愚禿」と称し、戒律を守れぬ肉食妻帯の愚か者こそが阿彌陀仏の救いの対象で助を続けている。また、宗派の事業として聖教の英訳やポルトガル語訳も進められている。現在、スイス、ベルギー、オーストリアなど6カ国に念仏者の集い「浄土真宗協会」があるが、アグネスさん母子らはワルシャワにお寺をつくる計画で、いずれ点が線へと広がる可能性もある。

外国人坊守は仏教国際化の最前線に立つだけではない。ひたむきな求道心と広い視野でやがて開拓的な体質を温存する教団にさわやかな新風を吹き込むに違いない。私はそう信じている。